

NPO 法人 JECK

International Cooperation Experts' Consulting

国際協力専門家コンサルティング

JECK2022年度 上期活動ニュース

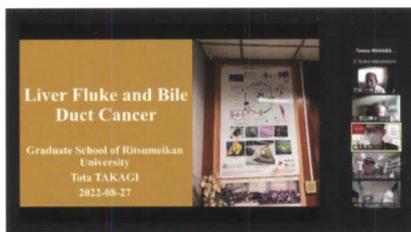
2022年度JECK総会開催(2022.04.23)

4月23日に、2022年度JECK総会を、初めての対面・ZOOM Meetingのハイブリッド方式で開催した。会場のJICA横浜センター・セミナールーム(いちよう・やまゆり)には9名、オンライン参加8名、賛否回答書提出6名、計23名が参加した。提案された第1号議案2021年度事業報告、第2号議案2021年度収支決算報告、2021年度監査報告、第3号議案2022年度事業計画、第4号議案2022年度収支予算、第5号議案2022年度役員改選のすべての議案が承認された。総会終了後、新入会員 高木冬太氏の紹介、短時間ではあったが懇親会が行われた。



2022年度JECK夏季フォーラム開催(2022.08.21)

COVID19が収束の気配が無いので、残念ながら今年も対面形式をあきらめてオンラインZOOM Meeting方式で開催し、立命館大学生を含めて延13名が参加した。高木冬太氏は、「タイ国コンケンにおける立命館大学フィールド調査報告」のタイトルで、タイで食べられている淡水魚を中間宿主として人間に寄生する寄生虫が胆管ガンの原因となり、この根本的な対策は教育であると講演した。小林氏は、南極越冬隊員の経験から、「南極観測から見えること」と題して、①夏の昭和基地は土木建築現場、②観測隊は社会の縮図、③南極の氷雪から地球の過去を知ることができる等経験者でなければわからない興味深い南極の話をも熱く語った。



SDGsよこはまCITY2022夏に参加(2022.07.02)

SDGsよこはまCITY2021秋、2022冬に続きSDGsよこはまCITY2022夏に参加した。今回は、黒川会員のご好意により用意された自前のZOOMアカウントを使用して、若林理事長の挨拶に続き、内田勝巳、服部孝政両会員がオンラインで講演した。
内田勝巳: ミャンマーの地方開発の現状 - 過去の対ミャンマーODAの経験を振り返って -
服部孝政: ウガンダ共和国ルウェロ県における米栽培普及活動について

エヤワディ地域では公共用水をポリタンクにためて家庭まで届ける水売りが職業となっている



横浜市助成金申請認可される (JECK英会話教室)

本年度横浜市第二次助成金申請を7月に実施していたところ受理され、10月末に給付されることになった。

NPO法人JECKとしては初めての横浜市からの助成金であるため、初回給付の上限が5万円と決められている。

使用目的は横浜市民を対象とした国際協力の第一歩とした英会話教育の充実を図り横浜市民への国際協力、国際交流意欲を高揚させることを目的としている。

尚、コロナ禍で中断していた英会話教室は6月から新講師クーパー・長子先生を迎え再開し、初回6月14日の参加者は12名であった。(9月度はコロナ蔓延のため中断)



歓迎! 新入会員紹介

下記5氏が入会しました(敬称略 入会順)

- 高木冬太: 立命館大学大学院経済学研究科 環境影響評価、廃棄物処理、漁業振興
- 林薫: 文教大学国際理解学科教授、Global Development Network理事、外務省第3評価主任
- 小林正幸: 日本極地研究振興会理事、元南極越冬隊員、微気象観測システムコンサルタント
- 今泉卓: 陶芸家、陶芸工房及び展示ギャラリー卓袱同店主、パラグアイで陶芸技術指導中
- 大橋知穂: ユネスコ・アジア文化センターで識字教育政策に従事、パキスタン赴任中



写真左より
高木冬太 小林正幸
今泉卓 大橋知穂

OJECK新役員JICA横浜センターを表敬訪問(2022.05.26)新役員5名が訪問し、JECKの近況報告、今年度計画について懇談した。

○横浜夢ファンド組織基盤強化支援会議(2022.07.12)横浜市民局とのZOOM会議で、提案、アドバイスを受けた。

OJECK講座「国際協力の現場」開講 今年の講座が、明治学院大学(2022.08.23)、関東学院大学(2022.09.26)で開講された。



2022年度役員挨拶

理事長就任ご挨拶

若林 敏雄



NPO法人JECKは設立後、3年あまりを経過しましたが、組織基盤は強固なものとは言い難く、新型コロナの影響もあり新しい事業を獲得するに至っていません。今後の2年間、これまでと同様に海外及び国内関連事業に分けて、事業を継続しつつ、1) 組織基盤の強化として、会員数の増大と組織活動の活性化を図り、2) 英知を結集して新規事業の獲得を図っていきたく考えています。更に、組織としてJICA、県や市の自治体、大学や外部団体等の行事には積極的に参加していきます。特に、会員の皆様からのご意見やご協力を得ながら、地域におけるJECK事業や活動の推進に努力したいと思いますので、ご指導、ご鞭撻下さいますようお願い致します。

副理事長就任ご挨拶

内田 勝巳



この度、副理事長を拝命し国内事業関係を担当することとなりました。長い間、名ばかり会員だったのですが、JECKのNPO法人化を契機に、当時の福田理事長からお声掛けをいただき、2020年度から会計担当理事としてJECKの活動に参加してきました。この間、コロナ禍のなかでオンライン会議を中心とした活動となってきましたが、役員を始めとする会員の皆様のJECKへの熱い思いを知り、副理事長としての責任の重さを感じています。JECK活動の大きな柱となっている大学における国際理解教育事業を持続発展させていくことを中心にJECKの活動を支えていきたいと考えています。会員の皆様の積極的なご参加にご支援を宜しくお願いします。

副理事長就任ご挨拶

松田 勲



前期に引き続き副理事長を担当させていただくことになりましたが、新型コロナ問題が長いトンネルからやっと抜けだし、経済活動再開の兆しが見える段階になって、本年度はエクアドル支援事業を本格的に活動させたいと思います。また、JICA中小企業・SDGsビジネス支援事業の制度改編と共に、中小企業の海外進出を支援するお手伝いができるよう、案件を精査していきたいと思います。会員の皆様の優れた国際感覚、見識を活かし、他団体との連携によるコラボレーションでJECKの総合力が一層発揮出来るような体制を築きあげたいと考えますので、ご教示、ご協力をお願い致します。

監事就任ご挨拶

加藤 博通



一昨年来新型コロナ感染症蔓延防止に明け暮れるなか、NPO法人JECKも創設3年目を迎えて実にその基盤を固めつつある。NPO法人は一般企業と異なりその活動は同法に規定された20種類の分野に限られ、JECKは「国際協力」「外国人の職業訓練」「国際理解教育及びその基礎となる語学教育」等の事業を行うことにより、国内外の人々に貢献し、ひいては国益に資することを目的とする。監事として、その活動を「会計監査」とともに「業務監査」をすることにより、有効、適切な業務執行に資することに努めたい。

監事就任ご挨拶

福田 信一郎



2003年夏任国から帰国し、翌2004年1月創立1年の旧JECKに入会しました。以来本年3月まで理事、副理事長、理事長、相談役の任に当たってきました。今回NPO法人であるJECKの監事に任命された機会に「NPO監事ハンドブック」の主要部分を開いてみました。監事監査の3つの任務は①業務監査、②会計監査、③不正行為及び重大違反の発見です。これらの任務を遂行するために理事や会員の皆様から独立した存在であることが求められます。この重要な任務遂行に小職のJECKでの運営への努力と経験生かせれば幸いです。今後監事という役目柄皆様と今迄と違った接し方をする場合があるかもしれませんが、今後とも宜しくお願い致します。

事務局局長就任ご挨拶

大平 一昭



2017年、2020年に続いて3回目の事務局を担当することになりました。最初の2017年度は無我夢中でしたが、それなりの努力を重ね、以前よりは効率よく業務を処理できていると思っていました。しかし「そつなくこなす」ということはマンネリ化ではないか?改革を避けているのではないかと反省し、初心に戻り、会員及び役員をサポート、JECK運営の円滑化に努めます。会員諸氏のご協力を切望いたします。

理事業務分担表

氏名	担当業務	氏名	担当業務
若林 敏雄	理事長 明治学院大学講座責任者	小泉 由紀子	会計担当 英会話教室
内田 勝巳	副理事長 関東学院大学講座責任者	小林 一	海外事業・中小企業支援アドバイザー
松田 勲	副理事長 海外事業担当	フレディ	エクアドル事業専任
大平 一昭	事務局局長 広報担当	アルミホス	
黒川 清登	全般アドバイザー	吉田 博至	理事長アドバイザー

◇ 初めての海外、東ティモールへ

私が初めて海外に行ったのは大学1年生の時でした。当時の私は国際協力サークルに入っており、そのサークルで夏休みに東ティモールで活動することになったのがきっかけです。

ご存じの方も多いかと思いますが、東ティモールは2002年に独立をした国で、それまでインドネシアと独立のための紛争を行っていました。出発前に紛争当時について書かれた本を読み、私の中で東ティモールのイメージは「貧しくてかわいそう」というものでした。

首都ディリの空港に降り立った時の事は、今でも思い出せます。初めての南国の空気感に高揚感と緊張が混じり合っていました。空港からはすぐさま活動地であるロスパロスという町に移動しました。ロスパロスは東ティモールの東の端にあり、車で5時間程度かかります。



東ティモールの海岸風景

移動中の車の窓から見るもの、感じるもの全てが新鮮でした。照りつける南の国の日差し、熱を帯びた風、エメラルドグリーン的大海、紛争時に焼かれてしまった山々、ところどころ壊れている道路、トタン屋根の家々…。日本では見たことのない風景でした。

◇ のどかな町ロスパロスで国際協力

首都ディリから車を走らせること5時間、目的地であるロスパロスに着きました。東ティモールの中では大きな町とのことですが、日本のイメージだと「山間の村の中心地」といった規模感でした。



ロスパロスの子供

道を歩いていると、外国人が珍しいのか沢山の子どもたちが「写真とって!」と言って近づいてきます。1度写真を撮ると子どもたちは盛り上がり、大人の人たちも、どこか穏やかで、のんびりと暮らしているように見えました。

しかし、当時の東ティモールでは、失業率が高くなかなか現金収入の機会がありませんでした。そこで所属していたサークルでは、アクセサリーの作り方を伝えて、出来たアクセサリーを東ティモール国内、あるいは日本で販売し、そのお金を現地に還元するという活動を行いました。「ただモノをあげるのではなく、現地の人々の自立のため、アクセサリー作りを通じた現金収入でサポートする」という考えの下で、実施していました。

◇ 生きている限り、続いていくもの

東ティモールに滞在していると、だんだんと仲の良くなる人も出てきました。仲良くなると、いろんなことを話してくれるようになります。中にはインドネシアとの独立のための紛争のことを、話してくれる人もいました。



紛争の壁画を見る少年

紛争時には多くの東ティモール人が虐殺されたと言われていいます。そのため、東ティモールの人に話を聞くと、身の回りの誰かは紛争の犠牲になっています。

残酷な話もあるのですが、そんな話を聞きながら、私は「インドネシアの事を恨んだりしないのだろう

か?」と疑問に思いました。そこで仲良くなった方に話を聞くと、「インドネシアを恨まない」という答えが返ってきました。なぜなら、今を大切に生き残った人で生きていくことが大切だと、話してくれるのです。



このように話してくれる東ティモールの方々に私は感銘を受けました。なぜ恨みを捨てることか出来るのだろうか。どうして、辛い過去を背負ってでも今を大切に生きていくことが出来るのだろうか。まるで、日本で生きている自分がちっぽけな人間に思えました。

同時にこういう声も聞きました。「東ティモールで起きた悲劇を忘れないでほしい」という声です。世界の人々から忘れられることが、一番怖いと言います。この話を聞いたとき、大きな悲劇は過去になることはないのだな、と思いました。悲しみや苦しみは薄れることはあっても、消えるものではないのだ。その人にとっては、生きている限り続いていくものであると。

◇ 現地のためとは何なのか?

夏休みの間の活動を通して、夏休みだけ行って活動するだけではなく、継続した活動が必要なんじゃないか」という話が、サークルの中で出ました。夏休みだけ行って、東ティモールの人々に関わるだけでは、やはり足りない私たち日本側の思い込みも多くなってしまいます。それでは現地の力に出来ない。大学1年生だった私も、そのような意見を持ちました。

「現地の力になるため



活動風景

その後、サークルは組織体制をしっかりとするためNPO法人格を取得しました。また資金の面では、JICA草の根技術協力事業に採択され、日本人2名を現地駐在員として派遣し、現地の人々に寄り添った国際協力を目指しました。

現地駐在員を派遣すると、その2人を通して現地の人々の色々な声を聞くことが出来るようになりました。しかし、すぐに試練が訪れます。東ティモールの治安悪化が原因で、日本人に退避勧告が出てしまいました。そのため、日本人の現地駐在員も日本に帰国しなければならなくなりました。

現地駐在員がいない中でも、どうにか電話やメールなどの遠隔操作で事業を継続しましたが、そのやり方だと見えなくなるものが多くなります。現地に寄り添ったことをしなければならぬのに、現地とのコミュニケーションが大幅に減ってしまったのです。

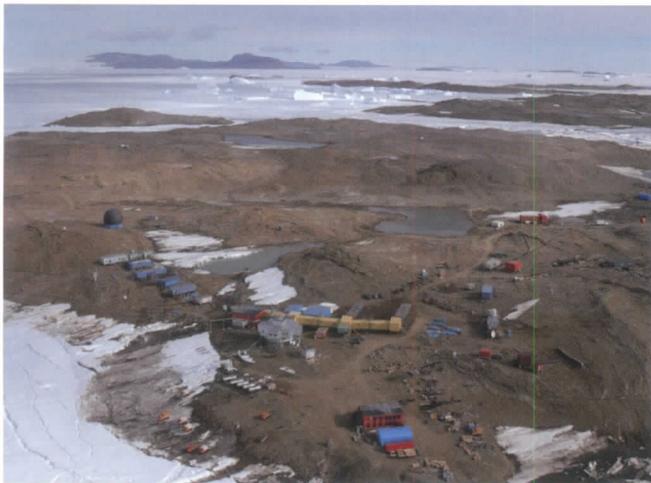
そういう状態で、日本で活動していると、本当に現地の役に立っているのか分からなくなります。現場の情報が少ない中で何かを決定することは、日本の側の身勝手な判断に陥る原因にもなるかと思えます。どうか3年間の草の根事業を終えることは出来ました。私個人としては、プロジェクトを通して様々な課題を感じるようになりました。

このようなことを、初めての海外である東ティモールで経験しました。昔話をしてしまいましたが、この経験は今の仕事にもつながっており、現在はJICA職員として草の根技術協力事業に関わっております。私自身が草の根技術協力事業の実施団体として経験したことを、JICA職員としても生かしていきたいと思う次第です。

*なかの・たかゆき JICA横浜センター 市民参加協力課 主事

1. 夏の昭和基地は土木建築現場

南極と聞いて思い浮かべるのは、見渡す限りの白い大陸… 多くの方がそう思うかも知れません。



昭和基地俯瞰

南極大陸は日本の約37倍の面積の大きな大陸ですが、昭和基地は大陸上にはなく4kmほど離れた島（東オングル島）にあります、海に囲まれているので、気温も大陸程下がらず、夏はすっかり雪が解けて地面が見えます。



夏の作業風景

地面が見えている1か月ほどのわずかな期間が昭和基地の維持管理に欠かせない土木建築の作業現場と化し、初めて夏の昭和基地に降り立つ「白い大陸」に憧れてきた隊員は、その光景に驚かされます。

2. 観測隊は社会の縮図

昭和基地は独立した一つの街と言えます。日本では見えないところで誰かがやってくれて

いた水や電気、廃棄物の処理等、設備の建設から維持・メンテナンスまで限られた隊員でやらなければなりません。そのため、機械・建築・電気・通信・環境保全関連の隊員の多くはメーカーから派遣されています。

そして隊員の健康に直結する医者や調理担当等、わずか15名の隊員が出身や年齢に関わらずそれぞれが「プロ」としてお互いにリスペクトし助け合いながら基地の生活基盤を整えています。それが機能することで初めて観測が成り立ちます。

昭和基地はまさに生活に欠かせない社会インフラの縮図とも言えます。

3. 地球の過去を知る

南極大陸を覆う氷の厚さは平均2,430mとされています。最大氷厚は4,897mで、氷の量は世界の雪と氷の約9割を占めていて北極とともに大気循環の冷源として大きな機能を持っています。

南極大陸の氷は過去の降雪が圧密されて氷になり、それが堆積したものです。南極大陸は海に向かって緩やかに傾斜しているので、氷は海に向かって徐々に押し出されています。海に到達して大陸から離脱したものが、テーブル型冰山となります。

一方、等高線の頂部付近は氷の流動が少なく、過去から現在までの氷が垂直に堆積していると考えられます。そこでボーリングをして基盤までの氷のコアを得ることで過去から現在までの空気を得ることができます。この空気の中には大気成分の他、様々な物質が冷凍保存されています。過去に地球規模で起こった噴火による火山灰や核実験で放出された放射性物質等も確認することができます。

日本隊は2007年に3025mの深さまでの氷床掘削に成功し、地球のタイムカプセルとも言える現在から72万年前までの氷が得られました。現在、日本の観測隊では100万年前までのサンプルを得るべく、南極大陸内陸部の新たな場所での掘削計画が進められています。

本稿は、2022.08.21に開催されたJECK夏季フォーラムで講演された。

*こばやし・まさゆき 専門分野：気象通信、南極観測、微気象観測システム 現職：（公財）日本無線協会試験部調査役、（公財）日本極地研究振興会理事

立命館大学経済学部では、1998年以降毎年、タイ国立開発行政研究院からの協力を得てタイ国におけるスタディーツアーを実施してきた。COVID-19により、2019年を最後に、本プログラムは休止されていたが、2022年に実施を再開することとなった。JECKの会員でもある立命館大学経済学部黒川清登教授が学生5名を引率し、2022年8月16日から26日まで活動を実施した。

タイ国では、コンケン大学の教員と学生らの協力を得て、コンケン県で実施されるプロジェクトを1週間で9つ見学した。本会報では、そのうちの3つに焦点を当てて報告する。



Banchob Sripa教授 写真後列中央の左の男性)

1つ目は、コンケン大学Banchob Sripa教授によって実施されるタイ肝吸虫症撲滅のプロジェクトである。コンケンをはじめとするタイ北東部やラオスでは淡水魚料理の生食習慣があり、それがタイ肝吸虫症の主たる感染原因とされている。また合併症として、胆管癌の発症リスクもありコンケンでは平均より3倍以上の胆管癌患者がみられる。生食習慣に加え、コンケンにある Lawa Lakeは肝吸虫の主な生息地でもあることが、その原因として考えられる。

対策として、病院への技術協力や訪問教育、ガイドラインの作成等を実施している。成果としてLawa villageのタイ肝吸虫症有病率が3年で67%から16%に減少したことが報告されたが、コミュニティレベルでの改善であり、完全撲滅のためには、広域協力や外部機関との連携の必要性が強調された。我が国も、日本住血吸虫病の克服やこれまでの技術協力の歴史から、貢献できるのではないだろうか。



コンケン大学でのプレゼン

2つ目に紹介したい事業は、Nong Nang-kwan villageの養殖漁場の見学である。この地域はかつて海であったことから、湖の塩分濃度が高くシーバスが生息でき

る環境にある。これは他の地域では確認できず彼らにとって貴重な資源となっている。また、彼らは地域集団を経済的に豊かにするために尽力していることも興味深い。強固な地縁的結合が、この目的意識を固め、シーバスの活用等イノベーションが起こったのではないだろうか。このような地域の有志、信頼性、規範、特産品の存在は内発的発展に必要であり、持続的な開発の現場を確認することができた。一方で課題もある。例えば、有志らの引退や関係人口の衰退はイノベーションの機会喪失につながる。このため近年注目されるのは、地域と外部の力が混合したネオ内発的発展である。

この内部の力と外部の力を上手く活用した事業を最後に紹介したい。それは、Khon Chim sub-districtのせんべい工場を訪問した際に発見したものである。ここでも、Ju Saithipという女性リーダーは、血縁的もしくは地縁的な関係にある従業員の収入拡大を事業の第一目的としていた。また、タイの伝統的な製菓であるせんべいに独自の加工技術で付加価値をつけ、地域の特産品として確立した点も、先に紹介した養殖の事例と類似している。一方で相違点として、外部との連携がある。彼女らはトヨタソーシャルイノベーションというトヨタが実施する事業に採択され、カイゼンの導入により、生産の効率化を可能にした。「タイを草の根か



JICAでのプレゼンテーション

ら強くしたい」という両者の目的意識が上手く合致したため、内部と外部の協働が上手く機能したと考えられる。よって、新たなイノベーションが起こり、より持続的な発展を可能にしたのだろう。

以上の報告を、JICAタイ事務所でもさせていただいた。JICA職員にとっても新鮮な話題を共有でき、嬉しく思うと同時に、今後の外部アクターの存在としてJICAから日本の有志がタイで活躍できることに期待したい。また、JICAタイ事務所所長森田隆博氏も強調したように、これからは双方での協力の時代である。タイの有志が、日本の社会問題解決に貢献することもあわせて期待したい。

*たかぎ・とうた 立命館大学大学院経済学研究科在学中 専攻分野：環境影響評価、廃棄物処理、漁業振興、地域経済学とりわけ島嶼開発途上国における環境・経済問題

海外での4年間の勤務を終えて

JECK会員 高木浩志*

皆様、初めまして。高木浩志と申します。

立命館大学経済学部在籍中(2013~2018年)にJECK会員の黒川清登先生のゼミに所属しており、そのご縁で昨年度JECKに入会しました。

大学卒業後は総合人材サービスを展開する株式会社ネオキャリアに入社し、海外事業部に配属され、2018年8月から2022年7月末までの約4年間海外で勤務をし、日本、タイ、ベトナムの日系、外資系含めて累計1,000社以上の企業様へ人材採用コンサルティングサービスを行ってきました。



今回は貴重なこの寄稿の機会を活用し、私の海外での経験を皆さまに少し紹介させていただきたいと思います。

2018.8~2020.12 タイ・チョンブリ / バンコク

最初の配属地はタイのチョンブリ県でした(バンコクから東に3時間程)。チョンブリはTOYOTAをはじめ、日系メーカーの工場が多く集まる工業団地エリアです。

毎日2-3件工場に訪問し、エンジニアなどの採用支援を行っていました。日本で使用していた製品が製造されている現場に実際に訪問することが出来たことは非常に良い経験となりました。

1か月程、チョンブリで勤務



した後にバンコクに異動し、2020年12月まで約2年半勤務しました。言語の違いはもちろん、文化や考え方の違いに戸惑い、最初は上手いかないことも多くありましたが、まずは社内のスタッフやクライアントのタイ人と仲良くなることを意識し、関係

構築に重点を置いてコミュニケーションを取ったことで徐々に仕事を上手く遂行できるようになりました。タイ人とはドライではなく、ウェットなコミュニケーションを心掛けた方が上手くいくということがタイでの教訓です

2021.01~2022.07現在

ベトナム・ハノイ、タイでの仕事の成果が評価され、2021年1月にベトナムのハノイに拠点責任者として異動しました。

当時私は社会人経験3年目でしたが、15名を超えるベトナム人スタッフをマネジメントするという大きなミッションを持ち、日々プレッシャーを感じながら働いていました。幸いにも、ベトナム人スタッフはみな真面目で仕事における成長意欲が高く、自立した人が多かったので、思っていた程マネジメントで苦勞することはなかったです。

一方で、当時はコロナウイルスの感染がベトナム国内で広がっており、2か月以上に及ぶロックダウン(原則外出禁止)など、行動制限で仕事にも大きくマイナス影響が出たため、その対応には非常に苦勞をしました。



有望なビジネス市場として世界から投資を受けているベトナムで実際にベトナム人と働くことが出来た経験は私の財産となりました。

今後について

今年の9月に日本のコンサルティングファームに転職しました。海外で培った経験も活かしつつ、より会社経営に近い業務の支援を行い、更なるスキルアップを目指していきたいと考えています。

また、その傍らでJECKなどの活動を通じて今後社会で活躍する志の高い若者の支援も行いたいと思っています。今後ともよろしく願いいたします。

*たかぎ・ひろし 立命館大学経済学部国際経済学科卒業
海外赴任国: タイ、ベトナム 現職: 株式会社ペイカレント・コンサルティング勤務

会員募集中
会費 正会員: 3,000円/年
替生 学生会員: 1,000円/年
学生特典あり

JECKのホームページ



編集後記

COVID19蔓延下、JECKの活動も制限を受けた。制約された条件下の会員の活動を、ニュースページで報告する。P2には、新役員のご挨拶、P3には横浜JICAセンターでお世話になっている中野さんから現在のJICAでの活動の原点となった東ティモールでの活動、P4,P5では、夏季フォーラムでの講演内容(タイでのフィールド研究報告、南極越冬経験)、P6には、最近の若者は海外志向が少ないといわれているが、大学卒業直後から海外で活躍した高木さんの報告等バリエーションに富む記事を掲載できた。会報 40号にも会員の投稿をお待ちしています。

【発行】 2022.10.01 【発行者】 NPO法人JECK 【編集委員会】若林敏雄(発行責任者) 大平一昭 小泉由紀子
【事務局】 横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜センター 3F URL: <http://www.jeck.jp> E Mail: info@jeck.jp